

『後見人は恋に落ちる』

著：神香うらら

ill：小路龍流

「お帰りなさいませ」

夜の十一時、帰宅すると小谷が出迎えてくれた。

「……起きてたのか」

住み込みの家政婦である小谷の就業時間は八時までだ。夕食は外でとったり小谷が作ったものを自分で温め直したりしているので、わざわざ起きて待っていないといいと言っている。早寝早起きの小谷が、こんな夜遅くに出迎えてくれるのは珍しい。

「ええ、今日はちょっと目が冴(さ)えちゃって」

小谷は上機嫌だった。彼女のこんな楽しそうな笑顔を見たのは久しぶりだ。

「航さんの荷物が届いたので、二人で整理してたんです。三階の北側の、使っていないお部屋に置かせていただきました」

「……ああ、ご苦労」

航はさっそく家政婦を味方につけたらしい。小谷くらいの年代の女性には、ああいうタイプの少年は受けがいいのだろう。

(母親を亡くしたばかりの、可哀想な子供だしな)

小谷の後ろ姿を見送りながら、英臣は皮肉めいた笑みを浮かべた。

居間に入り、スーツの上着を脱いでソファの背に投げ掛け、キャビネットからウイスキーのボトルを取り出す。

英臣は普段はあまり酒を飲まない。しかし今夜は飲みたい気分だった。

繊細なカットが施されたクリスタルのグラスに、父の秘蔵のウイスキーを注ぐ。強い芳香が鼻腔をくすぐり、それだけで酔ってしまいそうになる。

どさりとソファに座り、一口呷(あお)る。ストレートのウイスキーは灼(や)けるように熱かった。酒には強いほうだが、今日は悪酔いしそうな予感がする。

ネクタイの結び目を緩めながら、英臣は軽く目を閉じた。

今日一日の仕事を振り返ろうとするが……瞼(まぶた)の裏に浮かんだのは、なぜか航の顔だった。

———昨夜(ゆうべ)場末のみずぼらしいマンションの玄関で航を初めて見たとき、英臣は少々驚いた。想像していたのとは、ずいぶん違っていたからだ。

岸田から十八歳と聞いていたので、生意気な今どきの男子高校生を思い浮かべていたのだが、航はやけに繊細な容貌と美しい声を持った、どこことなく世慣れていない感じの少年だった。

(今どきあんな男子高校生がいるとはな)

まるで深窓の令嬢のようだと思い、そんなことを思ってしまった自分が可笑しくて喉の奥でくっつと笑う。

航は、母親の晴美とはあまり似ていなかった。晴美のような華やかさや自信に満ちた表情もなく、おどおどと怯えた目をして自分を見上げていた。

ただ大人しいだけの子供かと思ったが、母親のことをなじった途端、澄んだ目に怒り

の色を露(あら)わにしたことを思い出す。

しかし航は、その怒りを英臣のように感情のままに爆発させることはなかった。
(自分の立場を考えたら、言い返せないとも思ったのか)

一回り近く年下の少年が立場をわきまえて言いたいことを我慢している様子に、英臣は無性に苛立ちを感じ、更に煽(あお)るようなことを言ってしまった。

「あの……」

ふいに声を掛けられ、英臣は驚いて目を開けた。

いつの間に入ってきたのだろう。目の前に、今まで思いを巡らせていた少年が立っていた。

英臣の訝(いぶか)しむような目に、青いパジャマ姿の航がびくっと震える。

「あの、すみません、ドアが開いてたから……」

胸の前でぎゅっと拳を握り、航がか細い声で謝る。

「……………」

無言で航を見上げ、英臣はウイスキーを呷った。

母親と違い、日本人形のような顔立ちだ。白い肌が驚くほど滑らかで美しく、そのせいで余計に人形めいて見える。

細い指が、所在なげにパジャマのあわせを弄(いじ)っている。襟元から覗いた肌がやけに艶(なまめ)かしい。

「……あの、岸田さんから聞きました。しばらくここに置いて下さるそうで、ありがとうございます」

「……ああ」

そんなことをいちいち言いに来なくていいのに、と英臣は顔をしかめた。仕事から帰ってくつろいでいる時間を、他人に邪魔されたくはない。

「あの、お願いがあるんです」

航が顔を上げ、先ほどまでよりも強い口調で切り出す。

「社長の……堂前さんのお見舞いに行きたいんです」

長い睫(まつ)毛(げ)に縁取られた大きな瞳が、じっと英臣を見る。

柔らかそうな薄桃色の唇が言葉を紡(つむ)ぐのを、英臣は焦点の合わない目で見つめた。

「その必要はない」

我ながら酷く冷めた声だった。

航の表情がさっと曇るのを見て、この少年をもっと虐めてやりたいという気持ちがむくむくと湧(わ)き起こる。

「昏睡状態だと言っただろう。おまえが行ったところで、親父にはわからない」

言いながら立ち上がると、航がびくっとして一歩後ずさった。

傍に立ってみて、改めて航が自分より頭一つ分小さいことがわかる。英臣は百八十七センチあるので、航は百六十五前後だろうか。

「でも、会いたいんです」

尚も言い募る航に、英臣は苛立った。大人しそうな顔をしているくせに意外と我の強いところを見せられて、とことん踏みにじってやりたいような凶暴な気持ちが芽生える。

航を見下ろし、英臣は意地の悪い笑みを浮かべた。

「おまえの母親同様、親父に媚びを売ろうってのか」

「……っ！」

航の白い頬に、さっと怒りの朱が差した。磁器めいた肌が上気するさまが、ぞくりとするほど美しい。

大きな目が、英臣を咎めるように睨みつけてくる。

何か言おうと唇を開きかけるが……言いかけた言葉を呑み込むように、固く唇を引き結ぶ。

英臣には、航の葛(か)藤(とう)が手に取るようにわかった。反論したいが、母親のしたことを思えば自分にそれを言う権利はないとも思っているのだろう。

「親父に媚びなくても、おまえの面倒はちゃんと見てやる」

更に追い詰めたくて、英臣はせせら笑った。

航が酷く傷ついたように視線を逸(そ)らすのを見て、歪んだ欲望が込み上げる。

(……泣け、泣いてみせろ)

昏(くら)い嗜(し)虐(ぎやく)心(しん)が胸の中に広がってゆく。

この美しい少年を泣かせてみたい——。

しかし航は泣かなかった。大きな瞳は潤んでいるように見えたが、涙は零れなかった。

「……………」

俯いたまま、黙って英臣に背を向ける。

その細い腕を掴もうと手を伸ばしかけるが、航は敏(びん)捷(しょう)な子鹿のようにあっという間に居間から逃げ去ってしまった。

(……逃げられたか)

どさりとソファに座り、天井を見上げる。

——他人に嗜虐心を覚えたのは初めてだった。

自分には、サディスティックな趣味などまったくないと思っていたのに……。

(……俺はかなり酔ってるようだな)

苦笑して、英臣はローテーブルの上にグラスを置いた。疲れているのか、酷く酔いが回っているような気がする。

酔っているから、こんなおかしなことを考えてしまうのだ。

がんがん痛む頭を抱え、英臣は夢と現実の間を彷徨った。

上気した頬、潤んだ瞳、物言いたげな唇……………なぜか航の顔が、繰り返し脳裏に浮かんでは消える。

(……どうかしてる……まったく……)

呻(うめ)きながら、英臣はソファに倒れ込んだ。

本文 p43～50 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>